

札幌市立手稲中央幼稚園「優秀園実践提案研究会」開催レポート

2月10日（金）、2021年度「ソニー幼児教育支援プログラム」で優秀園を受賞した札幌市立手稲中央幼稚園による、「優秀園実践提案研究会」を開催しました。戸外を中心とする公開保育及び、研究発表・保育反省・グループ協議など直接対面する形で実施いたしました。認定こども園・幼稚園・保育所・小学校の教育・保育関係者からデイサービスの方も含めて約40名の参加がありました。

以下に、札幌市立手稲中央幼稚園による開催レポートを掲載します。

発表会概要

- 日時：2023年2月10日（金） 8:45～16:50
- 主題：夢中になる遊びの「どこがたのしいんだ？」から見えてくる深い学び
- プログラム
 - 公開保育(主体的な遊び・戸外中心) 8:45～11:00
 - 研究発表・保育反省 13:30～14:20
 - グループ協議 14:20～14:55
 - 助言 14:55～15:30
助言者 国際大学 准教授 木村彰子氏
助言者 札幌市立三角山小学校校長 渋谷一典氏
 - 講演 15:45～16:40
演題 「夢中になって遊ぶと心が動いて友達や教師とつながりたくなる」
～多様性の尊重と協働を実現するインクルーシブな保育～
講師 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所インクルーシブ教育システム推進センター
上席総括研究員 兼 センター長 久保山 茂樹氏
 - 閉会式 16:40～16:50

当日の保育の様子(保育反省より)

<年少 3歳児 にじ組>

(ねらい…「こうしたい」という思いをもちながら、好きな遊びを楽しむ)

・登園してすぐに見えるところに前日の氷や色水などを置く場所を常設しており、毎日変化を見ている様子がある。前日年長児から水風船をもらい置いて帰った子が「カチンコチンだ!」「凍ってる」など言いながら「中を出したい…どうしたらいいんだろう?」と思いをもったところから遊びがスタートした。水風船を分けてくれた年長児に教えてもらおうと教師から提案し、教えてもらいながら固まった水風船を開けてみる時のワクワク感や嬉しい気持ちに共感していくと、その周りで見ていた子も興味をもち、予想通り「私もやりたい!」と言い出した。(前日からそうなることを予想し年長組に水風船を多めに準備していた)年長児に作り方を教えてもらう中で、話をじっくりと聞いたり、やり方をよく見たり、「自分でもやってみよう」と夢中になって遊ぶ姿が見られた。夢中になって遊ぶためにも、教師も試行錯誤して見せながら、一緒に遊び喜び合うことを大切にしていきたい。



〈年中 4歳児 そら組〉

(ねらい…友達と一緒に思いやイメージを実現しようと考えたり工夫したりしながら遊ぶことを楽しむ)

・面白い滑り方を考えて見せ合うことが楽しくなっており、「後ろ向き滑り」や「ペンギン滑り」(そりの上につ伏せで乗る)年長児の「立ち乗り」などに刺激を受けて挑戦する子もいる。本日は、そりを伏せた上に乗ってみるという新しい滑り方を試す子がいたが、少ししかそりは進まず、そりが止まるとそりから滑り落ちてしまうことを繰り返し「急な斜面ならいけるんじゃないか?」「紐をふんでいるのでは?」と何度も試すもうまくいかないというところで本日の遊びを終えた。「どうしてだろう?」と繰り返す中で、考えたこと、試したり工夫したりしていることが、今後の遊びにもつながっていくのではないかと考え、いいアイデアを小さく呟いた子の発言を教師も言葉にして共感したり、「いいね」と言われて真似してもらえると嬉しいと感じ合える雰囲気大切に保育した。



〈年長 5歳児 こだま組〉

(ねらい…友達と思いや考えを出し合い、互いの良さを認め合ったり、自分の力を発揮したりしながら遊びを進めることを楽しむ。)

・水風船で氷を作る試みは、2月7日に昨年の年長さんの遊びを思い出した子がいたことがきっかけで始まった。9日に風船の形で凍ったことを喜んだ子どもたちの中に「色をつけてみたい」という子がいたので、濃い色水とスポイトなど、水風船の中に色を入れることができるように準備した。以前雪に埋めた水風船を探すのが大変だったという経験から、ウッドデッキの下の雪に埋める子と、木に吊るす子に分かれた。「今日は絶対に凍っている」という子どもたちの予測の元、見に行くと、吊るした水風船は凍っていたのに、雪に埋めた水風船は凍っていなかった。「なんで?」「どうして?」と不思議がる姿があった。また、固く凍った氷をどうやったら割ることができるかということに思いをもち、道具や足を使っていたが、「やっぱり氷は滑るから足じゃ割れないよ」と気付くいろいろな所に打ち付けて割ろうとする姿も見られた。色を着けていない氷に色水をかけていた子からは「やっぱり氷を作る時に色を入れなきゃダメだ」と気づきを伝えてくる姿があった。作った氷が「電球みたいだね」という言葉が聞かれたが、この氷を使って更に一步楽しめることを探りたい。



・学級で楽しんでいる踊りのポーズをしながらそり滑りをしたいというアイデアを受け、園庭に隣接する林で踊りの曲をかけてそり滑りが楽しめるようにした。3人でポーズをしながら滑ったり、友達の刺激を受けて立ち乗りに挑戦してコツを伝え合いながら遊ぶ姿が見られ、「雪質を感じながら様々な滑り方に挑戦し、友達と考えたり工夫したりして手応えを感じながら遊ぶ」という指導案の目指す姿が見られたと考える。

【質問】そりに立ち乗りしている子がいたが、安全面で気を付けていることは?

・年少の頃から『そりで立ち乗りをする年長児の姿』を見て憧れの気持ちを抱いているので、年長になると自然と立ち乗りに挑戦する姿が見られる。その日の雪質に応じて斜面の雪が固い日は「スピードが出すぎるからプラスチックのそりはお休みね。(米袋のそりは大丈夫)」などと伝えることもあるが、子どもたちも経験を重ねるうちに、その日の雪質や場の状況を考えて、判断できるようになっていくので、どうしたら安全に遊ぶことができるか考えられるような働き掛けを大切にしている。



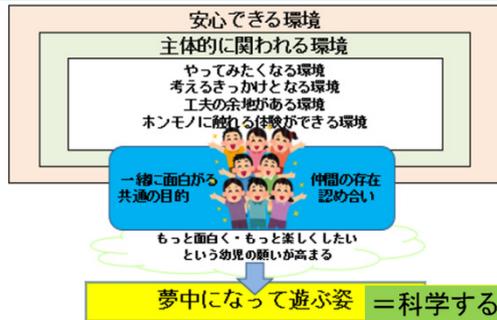
【質問】色水が何種類もあったが何を使っているのか？

・今年の年少児は雪を口に入れる子もいるため**食紅**を使っている。赤・青・黄色を用意したことで、混色の面白さに気がながら遊んでいる。年中は**入浴剤**を使っていた。香りがあったり、粉を雪に混ぜてそれから水分を足すと色が変わったりすることなどを楽しめる。今はまだ「なぜ混ぜているうちに色が変化するのか？」にあまり関心を寄せていないが、今後様々なことに気が付いていくのではないかと考える。年長児は雪像に色を着けるなどの目的から**絵の具**で色水をバケツに作り、お玉ですくいながら雪にかけるなど、発達の様子や用途によって様々な色水で雪を着色して遊んでいる。



研究発表

昨年度までの本園の研究と科学する心



本園は令和元年から令和3年、『夢中になって遊ぶ』幼児を育むことを研究のテーマとし、昨年度までの3年間研究を進めてきた。本園が考える『夢中になって遊ぶ姿』は、安心して気持ちを開放し、主体的に環境に関わり、やってみたくなる、考えるきっかけとなる、工夫の余地のある、ホンモノに触れる体験などに関わり、『もっと面白く、もっと楽しく』したいと願う幼児の気持ちの高まりにより、遊びや学びが深まる状況を指し、そのこ

とは『科学する心』の豊かな感性と創造性の芽生えを育む保育の実現であると考え、ソニー教育財団幼児教育支援プログラムに本園の研究論文を応募してきた。令和4年度から札幌市の施策を受け、本園ではインクルーシブ教育などについての研究を行うこととなり、「全ての子どもが安心して夢中になって遊ぶ姿」を求め、研究テーマを『私もステキ!あの子もステキ!みんなのステキが輝く☆幼稚園を目指して』とし、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所インクルーシブ教育システム推進センター上席総括研究員兼センター長の久保山茂樹教師に研究アドバイザーとなっていただき、新たな研究をスタートさせた。昨年の受賞論文より『僕たちみんな虫博士』2年保育児のT児のその後の事例を紹介する。

昨年のT児の夢中になる遊びを支えることで

- ・安心できる場所で、先生や少人数の気の合う友達と好きなことにじっくり取り組む
- ・穏やかな気持ちで過ごせる
- ・園が安心できる場になる
- ・T児が得意とすることを友達に認められる
- ・自分の好きな活動の中で友達との関わりが増える

毎日毎日飽きずに虫発表を繰り返すT児

願い、地域の『大人の虫博士』(札幌市立手稲中学校 教諭

昨年の事例『僕たちみんな虫博士!』では、T児は教師と一緒に遊び、好きなことにじっくり取り組むことで、穏やかに過ごせるようになり、幼稚園が安心できる場になった。さらに得意の虫取りを友達に認められることで友達と関わる機会も増え、毎日虫を捕まえてクラスで発表することを楽しみ、学級活動にも参加できるようになった。

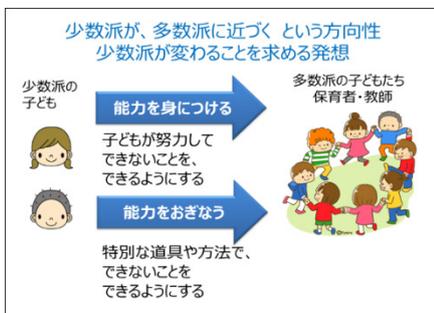
しかし、年長になっても毎日虫発表を繰り返す様子から、もう一歩深く虫の世界を楽しみ、友達と楽しさを共有してほしいと佐々木彰彦氏を年長組に招くことにした。

8月23日、虫博士が来園。『子どもが入るほどの大きな虫網』『木の上の虫も捕れる長い虫網』『虫集まるスプレー』などを使って虫を捕る様子や、子どもたちが捕まえた虫を、生きたまま顕微鏡で拡大して見せてくれたりするなど、虫博士の一挙手一投足にクラスの子もたちは歓声を上げた。中でもT児らは虫博士にリスペクトした結果、その後の生活の中で、蝶と蛾を捕まえるトラップ作り、甲虫や蛾などの標本作り、虫の夜行性を見る実験、蝶の越冬ボックスを作つての様子を見る実験など、冬になっても虫について疑問に思うことを調べたり、試したりしながら追究し続けていった。以前は虫に興味がなかった幼児もT児たちの追究する遊びに関心を寄せ、仲間に加わったり、応援してくれたりするようになった。T児らが虫について疑問に思うことについて「虫博士に聞いてみたい」と言うたびに、教師は虫博士と連絡をとり、助言を受けながらT児らのやってみみたいことが実現できるよう必要な材料などを準備し、仲間として遊びを支え続けた。



虫博士に「難しいよ」と言われた標本作りにチャレンジ。見事作り上げた!

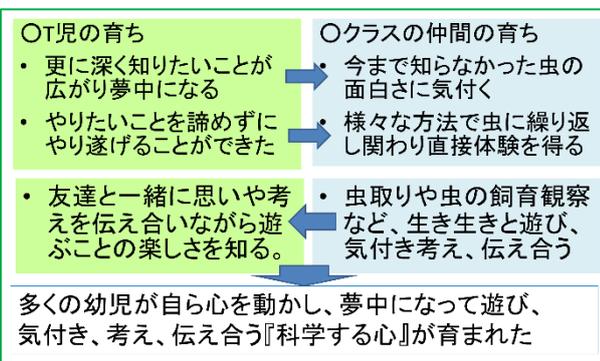
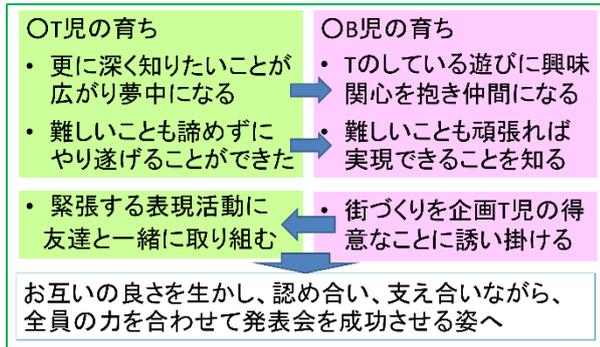
11月16日、朝は園庭に薄氷が張る寒い日。この時の札幌の気温は0.8度。この日もT児は、土の中にセミの幼虫がいるかもしれないと言いながら林の土を掘っていた。偶然側に転がっていた朽木を割ったところ、クワガタの幼虫が出てきたが、その日はV児しか見つけることができず、T児は悔しい思いを胸に降園した。その翌日、T児はクワガタが見つかる前提で自宅から飼育用ゼリーを持参し、「ここにいる気がする」と白樺の木を剣先スコップで叩き始めた。教師は白樺の木にはクワガタはいないと予測し伝えたが、その後T児は白樺の朽木からコクワガタの雄を発見し「ね、先生いたでしょ。これで白樺にもいるってことだね。」と伝えてきた。T児のこれまでの経験からくる感覚と思考は、大人の予想をはるかに超え、主体的な行動だからこそ生まれた深い達成感を味わう姿につながった。



これまでは「少数派が多数派に近づくという方向性、少数派が変わることを求める発想」であり、少数派が頑張らなければならない状況だったが、「多数派が、少数派に近づくという方向性、多数派の子ども、保育者・教師が変わるという発想」が多様性を認め合い、誰もが生活しやすく学びやすい環境づくりにつながるといふ。(※)

※ 2022.9.30独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所
インクルーシブ教育推進センター 久保山茂樹氏ご講演より

T児の夢中になる遊びを支えることで



粘り強く交渉し協力し実現することができた。T児は更に自信を高め、その力を生活発表会でも発揮することができた。

今回の事例では『大人の虫博士』との出会いが『やってみたくなる環境』『ホンモノに触れる体験ができる環境』の大きなポイントとなったが、ここで願ったことは、幼児期に「詳しい知識を与える」ということではない。T児の夢中になる遊びを支えた結果、多くの幼児が自ら心を動かし、夢中になって遊び、気付き、考え、伝え合う『科学する心』が育まれる環境となったのだと考える。

虫博士 札幌市立手稲中学校 教諭 佐々木彰彦氏 より

中学校では自ら探究する生徒を育てることが理科教育の永遠のテーマである。それが幼稚園の段階でここまで高度にできるものなのだとことを知れてよかったということと、まさに理科教育で追い求める姿が幼稚園児にやられてしまったという嫉妬がある。自分で学び疑問に思ったことをとことん追求していくということは、座学中心の中学校では非常に難しいことであり、日々苦慮している。特に理科の領域では『物理』『化学』『生物』『地学』4領域あるが、生物学に興味をもつということは、幼少期の経験がとても大きいと自身の経験からも思う。その幼少期に大人が寄り添って子どもたちが興味をもったことに対して、いいタイミングで私のような大人を使い投入することが、このような成果を生むものなのだとことを知れて貢献できたことを嬉しく思う。このような子どもたちが幼稚園で育つと、中学校理科教育はさらに中身の濃い教育ができるのではないかという思いを抱き、幼児教育の重要性を感じることができた。



物理的に近づくということばかりでなく、今回のように、T児が好きなものにクラスの友達が興味を寄せきっかけをつくることができたことが、「多数派が少数派に近づく」という方向性になったと考える。では、その状況は多数派にとってどのような影響があったのか？

B児は虫に興味が無かったが、虫博士に出会い、虫への関心が高まり、標本作りをはじめとするT児の虫との関わり方に深い関心を寄せ、T児を褒めるようになった。秋が深まる頃、自分のやりたいことやイメージは豊富なのに自分からは言い出せず誰かの遊びに加わることが多かったB児が初めて「学級皆で街づくりをしてみたい」というアイデアを担当に提案してきた。担任は絶対にB児の思いをかなえたいと考え、実現するよう後押しした。B児は、あきらめずにやりたいことに取り組み楽しむT児の姿にも刺激を受けていたのではないかと担任は考察している。初めてのことが苦手なT児は「街づくりはやりたくない」「何すればいいのかわからない」と躊躇するが、B児は「虫を作って虫博士になってお客さんを呼んだらどう？手伝うよ」などT児の得意なことを生かした提案をし、

グループ協議

〈年少 3歳児グループ〉

- ・3歳児が氷を作りたいという思いをもった時、担任が「年長さんに教えてもらおう」と言って5歳児に刺激を受けられるようにし、教師も一緒に年長児に教えてもらいながら氷を作る姿を見て、こういった関わりで、子どもたちの遊びを広げていく力や、3歳、4歳、5歳と憧れの気持ちが育っていくのだと感じた。
- ・林で長い木の棒を持って魚釣りのイメージで遊んでいる子がいた。振り回すのではないかと「危ないよ」「友達にぶつかるよ」などの声がかかるのではないかと予想したが、これまでの経験からか、友達にぶつからないように自分で考えて動いていて、思いやりの気持ちの育ちを感じた。
- ・自園では『色水遊びをする』ということが目的になっているが、この園ではそれらを使ったごっこ遊びになっており、氷をテーブルにして遊ぶなどの子どもたちの発想力や、教師の促し方、展開していく様子が学びとなった。
- ・何よりも子どもたちの表情がのびのびとしており、好きな物を自分で考えて遊んでいる姿があり、遊びに迷う姿がないと感じた。登園してすぐ「氷はどうなっているか？」すぐに見られる場所に氷があるので、それを目的に登園し「今日はこれを使って遊ぼう」と遊びにつながっていくのが分かった。



Q. 戸外遊びが長かったが、途中で寒くて中に入りたいという子もいなかった。これまでどのように雪遊びを楽しんできたのか？

- A. 今年の3歳児は入園当初は歩き方も幼く、コロナ禍で遊びの経験が少なかったことが影響していると考えられたため、戸外で体を使って遊ぶことを意識してきた。上着を脱いで室内で遊び出すと、戸外遊びに気持ちが向かなくなることを予想した。雪や氷に触れて遊ぶことを経験させたいというねらいもあり、朝の身支度を後回しにして登園してすぐに荷物を置いて遊び出せるようにしてきた。雪の中を人魚になって泳いだり、雪の山のでっぺんで飛行機に乗ってお出かけするイメージで遊んだりするなど、幼児のイメージを受けとめながら遊ぶと「次はこうしよう」というイメージが子どもからどんどん出てくるようになり、一人一人のイメージを教師が必死で受け止めながら遊ぶうちに、室内に戻るタイミングが遅くなっている。



- ・様々な発見を教師がすぐに伝えてしまうのではなく、自分で発見できるように引いて見守る援助が大切だと感じた。
- ・5歳児が氷のボーリング場を作り、氷を磨いていた。自分たちでしかけを作ったり障害物を用意したりしていた。自分たちの考えや工夫が生活を面白くしていくのだという感覚が、明日はこうしようという意欲につながっていくと、迷いなく遊ぶ子どもたちに育っていくのではないかと。それが科学する心につながっていくのではないかと。

〈年中 4歳児グループ〉

Q. 5歳児は『科学する心』につながる様々な気づきが見られ、3歳児は色水に触れて『やってみて楽しい』、4歳児はどういう気づきがあるのか？どう提案しているのか？

A. 4歳児なりの気づきがたくさんある。氷づくりを楽しむ中で、今日は寒かったので固く凍っていたが、気温によっては凍らない日もあり、実際に指で触れてみたら「表面だけ水で中は水だ!」など、自分たちで体験して「どうしてだろう?」と考える姿があり、それが科学する心につながると考え、「どうしてだろうね?」と教師も一緒に考えることを大切にしている。また、タライで作った色雪を残しておく、翌日大きな丸い氷ができ「テーブルにしよう」となったり、三角に割れたら「ピザみたい! 焼いて食べよう」など、偶然できたものから子どもたちがイメージを広げて遊んでいる。



Q. 昨日こうだったから明日はこうしよう…と遊びが継続されている。自由に遊んでいると、気づきがある子とその場にはいないから気付かない子がいるように思うが、どのように共有しているのか？

A. それぞれの夢中になっている遊びの楽しさが伝わるように、ステキ写真館という場を作って遊びの写真を掲示したり、帰りの時間「今日楽しかったことは何ですか?」など発表タイムを作ったりしている。自分の姿を写真で見ることで、客観的に自分の良さにも気付いてほしいと願っている。

Q. 年長さんが見つけた虫のファイルが側に置いてあったり、外には蝶の越冬ボックスがあったり、そういうのを間近で見てきた4歳児がどんな影響を受けたり、4歳児なりの科学する心がどのように育っているのか？5歳児との連携など知りたい。

A. 虫好きのT児の遊びの場にたくさん人が集まる状況はドキドキさせてしまうこともあるので積極的に仲間入りはしなかったが、虫のことで分からないことがある時には「T児に聞きに行こう!」と頼りにしていた。T児もセミの羽化の瞬間などを年中にも知らせてくれて、一緒に見たりすることにもつながった。年長になった時にそれらの刺激を生かして遊んでいくのではないかと考えている。この環境ならではの体感したことが、伝承され続けている。



Q. 幼児が「こうだったらいい!」と言いながら遊んでいるのが印象的であった。自園の幼児からは「教師分らない…どうしたらいいか教えて」「できない」「もういい」と言われることが多いので、普段から「どうしたらいいだろうね?」と自分で考えられるような教師の関わりが大切なのだと感じた。諦めてしまう子の気持ちをどうやって支えたとよいか? 気をつけていることはあるか?

A. それぞれの子どもの中にある「諦めてしまう原因は何なのか?」というところに注目。『難しい』ことに抵抗感があるようならそこを軽減してあげる、『初めてのこと』に抵抗感があるなら、あらかじめ試せる場を作るなど、一人一人に応じた対応を心掛けている。その子の好きなことを通して、成功体験をどう味わわせるのかが大切である。

〈年長 5歳児グループ〉

- ・ソリの立ち乗りに挑戦する際、どこまで座らずに立って滑ることができるかなど、自分なりにチャレンジしてスリルを味わったり、できたことを友達に教えたりしながら夢中になって遊んでいた。自分なりの目標を立てて、継続して遊んでおり、こういう遊びが『自発的な遊び』というのだと感じた。
- ・チャレンジを怖がる子もいる。「やってみよう」と思った時を逃さずに気持ちを支えるようにしてきた。失敗しても「何回だってできるよ」「上手な転び方だった」と認めることで、友達同士でも「今の良かったよね」と認め合う言葉が増えている。「どうやったらうまくできたの?」「手を広げてみたんだ」などコツを伝えあい、遊びが継続している。担任が「ナイスチャレンジ」という言葉で挑戦そのものを励ます言葉が子どもたち同士でも聞かれるようになっている。
- ・小学校の立場から、幼稚園教諭のリアクションが分かりやすく、認められているということが子どもたちに伝わりやすいのだろう。指示の出し方なども特別支援学級と似ていると感じた。
- ・雪遊びは生活科で取り入れているが、経験が少ないようで、「遊んでいいよ」と言っても何をしたいのかわからない児童が増えている。幼児期の経験が大切だと感じた。

Q. そりの立ち乗りの遊びにケガの心配はないのか？ルールはあるのか？

A. 最初から立ち乗りする子はいない。何度もソリ遊びを経験するうちに、止まる、曲がる、しゃがむ、など滑り方を工夫した上で、立ち乗りの挑戦をするようになっていく。今日はふかふかの雪だから転んでも大丈夫など、教師も共通理解しながら安全に挑戦できるようにしている。

A. どこまで子どもに任せるのか？ルールはどうするのか？などの話があったが、小学校につながる学びということで考えると、規制しなければならないこと、きまりとして守らなければならないこともあるのだろうが、幼児期は、自分の体で感じたこと、自分の体で覚えたことがあるのとないのとでは、小学校で「こういう決まりがあるよ」と言われた時の理解に大きな違いが生まれると考える。幼児期に自分たちで遊びやルールを考えながら遊んだ子どもたちは、小学校に行った時にも「どうしてこのルールがあるのか」と考えることができるが、そういった経験が無い子たちにとっては「大人に言われたルールは守らなければならない」と考える。幼児期は体で感じることを通して全てを学んでいくことを、今特に大切にしたい。「立ち乗りは危ないからダメ」と言う前に「立ち乗りができる体をつくるにはどうしたらいいか」を考えていくことが大切ではないだろうか。



3歳児も崖に登りたがる。教師はどうやったら安全に実現できるかを考え話し合い環境を整える。下で見守る大人、危ない木には布団を巻つけている。このような生活で子どもたちはどんどん力をつけていく。けがをしない体や判断力が育っていく。

助言

木村 彰子氏/ 札幌国際大学 准教授

手稲中央幼稚園に来るたびに、教師も子どもも『生きてる』と感じる。

本日は年長児が前日に戸外に置いた水風船が、どうなったかを確認めるところから遊び始めていた。水風船を置いた場所によって凍ったり凍っていなかったりするのを見て、「何でこっちはこんなにコチコチなんだろう？」と、教師も一緒に遊びながら言葉の仕掛けをしていた。凍っていなかった水風船から水があふれる様子を見て「何かよく分からないけれど…」という言う子もいたが、よく分からなくてもいい。理屈ではない。感じたり考えたりしていることが大切だと教師が思っていることが会話などから分かる。この園に来ていつも思うのは、「子どもがどう思っているのか？」「子どもが何を感じているのか？」など、一人一人の子どもの思いを大切にする、子どもから出発する保育だということである。

室内でボーリング遊びを繰り返し楽しんできた子たちが、外にもボーリング場を作ろうと思いつき、氷を作りツルツルに磨いているという場が園庭にあった。ペットボトルに入っている水の量によって点数を決めて遊んでいたが、途中で勝手にルールが変わっても受け止め合う子どもたちで、教師が「え？何で？」など言いながらも、その状況を楽しんでいた。子どもがルールを決め、遊びを面白くする。それを教師も周りの子ども「いいね」と受け止めている。



「こうするともっと面白くなる」ということを毎日考えながら遊んでいる子どもたちは幸せだ。側にたわしなどの掃除道具が置いてあり、氷をツルツルに磨く道具だという。つまり、子どもから生まれる遊びは放っておけばいいのではなく、環境の準備がとても大切である。



そうしている間に雪山のてっぺんで漫才が始まった。お題は「男はだれでしょう」。こうなるとここはもう舞台だ。室内の発表会のステージだけが表現というのではない。なぜこのような面白いことを子どもは思いつくのだろう。

グループ討議の中で、危険なことについてどのように配慮しているのか？という問いがあったが、どこが危ないか、危なくないか、危なくない方法は何かを、子どもたちがよく知っているというのを感じた。今日も、おそらく教師が考えている坂滑りの方向とは違う方向に滑っている子がいた。大丈夫かと様子を見ていたが、参観している教師たちの手前でソリは止まった。感覚で分かっている子どもたちなのだ。ではなぜ分かるのか？ととにかく存分にやり続けている。やりたいからやっている。「今日の雪はむずいな」こんな言葉を言っている子もいた。様々なことを感じたり考えたりしている子どもたち。



それがまさに「科学する心」につながっていくのではないかと考える。この雪山で、遊び尽くさず放任しては危ない。安全になるためには、子どもがそこを知り尽くしている必要がある。教師が「危ないよ！今日はおしまい！」ではない方法で危ないことを伝えていることも大切である。

文部科学省もこのような育ちが小学校につながると言っている。参加された他の園でも教師の人数など、本当はもっと多ければいいのに…と思うこともあるだろうが、「目の前の子どものためにできることは何だろう？」「あの子の思いはどうなんだろう？」と考えることからこの保育がスタートしている。頑張してほしい。

助言

渋谷 一典氏/ 札幌市立三角山小学校 校長

『科学する心を育てる』のサブタイトル、『～豊かな感性と創造性の芽生えを育む～』の理念に大変共感している。私は平成 29 年度から 4 年間にわたり、学習指導要領改訂業務に当たってきたが、例えば生活科の内容(6)「自然や物を使った遊び」については、「幼児期の教育における経験を生かした活動に取り組む」という趣旨が記載されている。園で展開される豊かな遊びが小学校低学年における自然の面白さや不思議さを重視した活動を下支えし、そこで培われた「科学的な物の見方や考え方の基礎」が 3 年生以上の理科教育に寄与するのである。

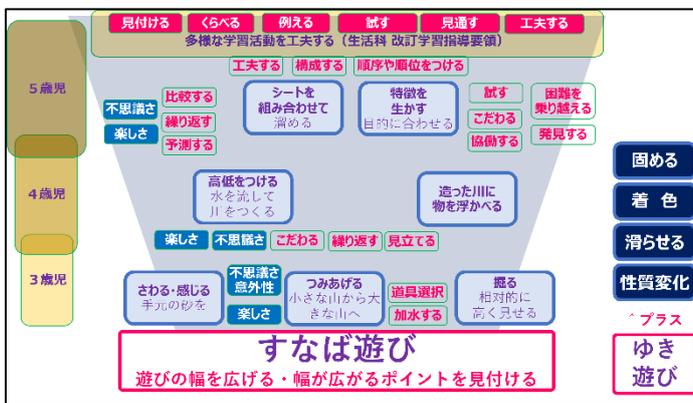
学校の教員が幼児の遊びに関わると、つい「どうしてこんなふうにしたの？」などと聞いてしまうのだが、年中児はあくまでもお店屋さんごっこの文脈の中でやりとりが成立していたのが印象的だった。そのような中でも、例えば氷でこしらえたピンク色のドーナツを「〇〇味ですよ」と紹介していた幼児は、色をもとに味を連想したり、見立てたりしており、科学的な思考が発揮された姿と考えられる。一方、年長児は「どうやって作ったの？」という問いかけに、得意になって説明するなど、発達の段階によって表れが異なっていた。夏に参観に来た時、どんな葉や花を入れるかなど色をイメージしながら色水遊びを楽しんでおり、季節を越えてこうした遊びを積み重ねてきた経験があって、現在の姿があると感じた。加えて、積み重ねてきた遊びの中に含まれる「学びの要素」が実に豊かであった。



【年中幼児】子どもはあくまでも遊びの文脈の中で、科学する心が機能するので、「気付かせたい」という教師の思いには関心を示さない…

どうしてこんな風に作ったの？

…美味しいのよ？
いちご味よ！



砂場遊びを例にして「学びの要素」を考えてみる。「触る」「積み上げる」「掘る」などの行為の中には、「予測する」「繰り返す」「見立てる」などの思考が働き、それが小学校以降の生活科で「見付ける」「比べる」「例える」「試す」「見通す」「工夫する」などの思考に確かにつながっていく。雪という材の場合は、更に「滑る」「着色する」などの要素が加わるため、北国の幼児教育の強みであろう。

本日の活動を小学校生活科の視点で捉えてみたい。生活科では、遊びに含まれる「学びの要素」を効果的に活動に組み込み、試行錯誤を繰り返しながら「気付き」の質を高めていく学習を展開していく。育成する資質・能力も「知識及び技能」ではなく「知識及び技能の基礎」と表していることから、幼児期における豊かな遊びの体験を通して、様々な物事を認識していく過程を身に付けていくことが大切である。そのような観点からも、幼小の学びの接続は極めて重要であり、教育方法が異なるから…といった校種の都合で停滞することがあってはならない。大切なのは幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を踏まえた教育活動を実施し、主体的に自己を発揮しながら学びに向かうことが可能となるように、互いの教育への理解をより一層進めていくことであろう。

講演 「夢中になって遊ぶと心が動いて友達や先生とつながりたくなる」

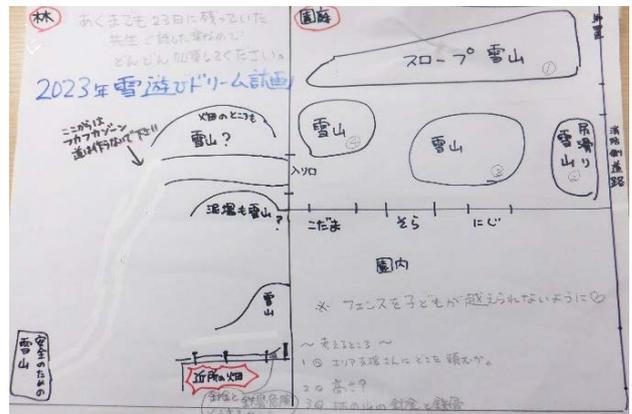
—多様性の尊重と協働を実現するインクルーシブな保育—

久保山 茂樹 氏 /

独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所 インクルーシブ教育システム推進センター
上席総括研究員 兼 センター長

夢中になって遊ぶと心が動く、心が動くと伝えたくなる、伝えたくなるとつながりが生まれる。「あんな風に遊ぶのって凄いなあ…」と思う相手は障害のある子どもかもしれない。障害が有ろうと無かろうと、憧れのまなざしはあり、そこに「つながり」が生まれるのだと考える。そう考えると、夢中になって遊ぶことができる環境があるということが「科学する心」につながり、「インクルーシブな保育」にもつながると押さえている。

1月27日(金)、手稲中央幼稚園を訪れた。雪遊びをすれば「ソリ遊び」「雪合戦」「かまくら掘り」くらいしか思いつかなかったが、広い園庭で雪という素材を使って、日ごろ楽しんでいる遊びをやったらどうなるのか？ 子どもたちは思い思いに試していた。中には、鍋の中の水にひと塊の雪を入れて「卵を湯煎にかけています」と言う子がおり、こんなことを思いつくのかと驚いた。子どもたちは、それぞれの場所でちょうどいい具合に分散して好きな遊びに没頭している。障害が有ろうと無かろうと、好きな遊びを思う存分にとことん遊び込む。そんな環境が確かにあった。それは正にインクルーシブな環境だと思った。『友達の遊びを見ようと思えば見える』『私もやりたい』そんな気を起させるような環境を先生方はかなり意図的に作っている。職員室に雪山の設計図を見つけた。それぞれの子どもたちが思い思いに好きな遊びに没頭できるように真剣に考えてこの環境が生まれていると知り衝撃を受けた。よく見ると、「どんどん加筆してください」「針金と鉄骨危険どうするか？」なども書いてある。子どもが豊かに遊ぶ、インクルーシブな環境は、こういう見えない努力の賜物だと考える。教員ばかりではなく、業務員さん、保健の先生、預かり保育士、事務補さんも含め、職員全員でしっかりと子どもたちを見守っていることが伝わってきた。



1. 子どもの心が動くということ

中学校の発達障害通級指導教室の先生から「うちの教室には遊び直しが必要な生徒がたくさんいる」と聞いた。発達障害について、早期発見、早期対応、早期支援が言われるようになり、中学校の段階で困ったことをする生徒は少なくなった。その一方で、「ぼくはこれがやりたい」「私の得意なことはこれ」「もう一回やりたい」など、

インクルーシブな保育とは
支援が必要な子ども、まわりの子どもも育つ保育

- 一人ひとりの子どもが大切にされる保育
- できないことの改善よりも、子どもの手持ちの力で、いま、ここで、できていることを認め、豊かにする保育

得意を生かす = 幼児期から自己肯定感を育む
・支援が必要な子どもの得意が、まわりの子どもに伝わる

まわりの子どもが育つ = 共生社会の担い手が育つ
・葛藤も経験し、解決する経験を経て育つ関係性
・保育者の姿がまわりの子どもに映り、移っていく

自から心を動かして口に出せる生徒がいなくなった。大人に言われた通りに動く生徒に育ってしまった。そのため、先生が生徒と本気で遊び、何が楽しかったか感想を引き出すのだという。このことは「幼児期から小学校の間で、もっと一人一人の好きなこと、得意なことを大事にしようよ」というメッセージではないだろうか。

障害が有ろうと無かろうと、出来ないことの改善ではなく、子どもが今もっている力、得意なことを生かし認めることで豊かになる。そんな環境で子どもたちは安心して生活できるようになる。そうはいつでも、特別な教育的支援の必要な子の周りの子たちは、様々な葛藤や悔しい思いを経験することもあるかもしれない。それでも4月、5月に比べて2月になる頃には、〇〇ちゃんに関われるヒントはたくさんあると分かってくる。少数派と言われる子たちが、頑張って頑張って多数派に追いついていくという発想ではなく、周りの子が少数派と言われる子に少しずつ歩み寄っていく。こういう環境がまさにインクルーシブな環境なのだ。

私たちは支援が必要な子と関わる時、気になることが見える。そういう時、私たちのまなざしが評価のまなざしになっていないだろうか？出来ないことはその子の全てではない。そもそも子どもは出来ないことを訓練するために生まれてきたのではない。どんな子どもにも必ず手持ちの力があり、その力をどうやったら生きていく力に変えていけるのか？どうやったらもっと楽しいことができるのか？そういうことを広げるために子どもたちは生まれてきたのである。「なるほど」「面白い」「そうか」など、子どもの横に並んで子どもと同じものを見ようとする共感のまなざしが子どもに伝わるのが大切である。

「気になること」に 隠れてしまっている
良さ、得意分野、その子が役に立つこと
いま持っている力でできること、そして、魅力！
を見つけ、ともに楽しむ!
→ いつも、一緒にいるからこそ
忘れてしまうかもしれない

- 子どもへのまなざしが、**評価のまなざし**になっていないか？
- 出来ないことが、その子のすべてなのか！
- 子どもは、訓練するために生まれてきたのか？

2. 子どもとのコミュニケーションを豊かに!

「あれは楽しかったね」が通じるのはなぜ？



「あれは楽しかったね」が通じるのはなぜか？
「あれは楽しかったね」と言っても、共有する「あれ」が無いと通じない。子どもと先生の中で共有する出来事を増やすこと。これが子どもにとっては「遊び」である。しかし、それだけでは通じない。子どもと先生とで通じ合いたい気持ちがあることが大切である。この三つの要素がコミュニケーションを語る上で大切なのである。

① 言葉が使える

使える言葉はいろいろあるが、音声の言葉だけでは理解の難しいお子さんもいる。

そこで、幼稚園・保育所・こども園では、子どもたちが目で見えて自分で判断して動けるように「実物」「写真」「絵」「文字」など**視覚の言葉**で普通に表している。

「優しくします」が分からないお子さんがいる。音声の言葉としては「優しく」と言える。しかし、**動作の言葉**として、体の表現として、優しくするということがどういうことなのか経験的に分かっているのだ。大きなシャボン玉の中に小さなシャボン玉を入れる遊びをする時、乱暴な動きを100回やっても成功しない。「そーっとそーっと…」**優しい動作**ができていたその時に音声の言葉を乗せていくことで初めて「優しく」という言葉が分かる。絵カードでは「優しくとはこういうこと」と伝えようとしても伝わらない。このように遊びの場面で体験的に「優しい動き」が分かってくるのである。体を使った遊び、**動作の言葉**は一対一の関係から生まれる。雪の中で思う存分遊ぶ時、様々な表現を一対一の中でしっかりと体験していくことも表現できる体作りにつながる。**動作の言葉**を使っていくことで「確かにコミュニケーションできた」という体験を積み上げていくことができる。それが**視覚の言葉**や**音声の言葉**を豊かにするのだ。



壊れないように「優しく」触ってね

② 伝えたいことを豊かにする

本気になって遊ぶ、遊び込む、夢中になって遊ぶ、部屋に戻りたくない。それくらい遊ぶと心が動く。そうすると「もっとやりたい」「これが大好きなんだ」と伝えたい。それを大人と子どもで様々な形で共有するということが大切である。手稲中央幼稚園のように大人が好きなことに心を動かしていることをしっかりと子どもに見せることも大切である。子どもは「この先生は無理やり付き合っただけで遊んでいるのだな…」ということを見抜く力を持っている。

好きなこと 得意なこと…必ずある！
支援の必要な子どもにも、先生にも

●**子どもの** 好きなこと・得意なことにかかわる
→ もちろん大切！

●**先生の** 好きなこと・得意なことで遊び込む
→ もっと大切！

↓
子どもは、
目を輝かせて、徹底的に
遊び込む先生が大好き！



私たちのツリーハウスも
完成させたい！

子どもが夢中になっている遊びを時間で断ち切るような保育では、子どもが最後までやり遂げる経験ができず「すぐにやめてしまう」「あきらめてしまう」という子に育つのも無理はない。教育相談で園から「集中が続かない」「落ち着きがない」と言われた子に、満足するまでプラレールに取り組ませると、じっくりと取り組むことができた。最後の一つのレールを組み込んで大きな線路が完成した。「遊びきった」「やり遂げた」「満足するまで遊び込んだ」そういうことをしっかり保障していくことが大切である。

③ 通じ合いたい気持ちを育むために

先生とつながりたいという気持ちが育っているだろうか？幼稚園・保育所・こども園・小学校におけるコミュニケーションの始まりが大人になっていることが多い。大人が問いかけて、それに子どもが応答するというのが学びの基本になってしまっているのかもしれない。しかし、子どもの育ちを考えると、自分

子どもが安心して発信できるのは

- できない自分をさらけ出せる、
SOSも出せる
- 「できるーできない」「○-×」ではない
まなざしや、言葉かけ がある
いいなあ！好きだなあ！おもしろいなあ！
- いま持っている力で、
何が出来るだろう 何が楽しめるだろう？
が大切にされる

自分が何かを発信すると、受け止めてくれる人がいる。返してくれる人がいる。そういうことを味わう中で、もっともっと子どもたちは人とつながりたい気持ちを育てていくのである。自閉症スペクトラム症に代表される人との関わりに困難さがある子どもたちはなおさら、子どもたち自身が発信したことを受け止めて応答的な関係を作ることが大切になってくる。幼稚園・保育所・こども園の先生は特にこの応答的な関係を大切にしてほしい。その時「できる」「できない」ではなく、「あなたのしていることに関心がありますよ」そんな、子どもが安心して発信できる発信が大切である。

一人一人が安心して心を動かし、子どもが自ら発信できるようになってくる。そうすると、その発信を受け止めることで、つながりがあちらこちらに生まれる。そうやって共に生きる子どもたちに育っていく。子どもたちの10年後、20年後、社会の担い手になる頃は、超高齢化社会である。また、外国につながる人たちは増えていると考えられる。「自分の言葉が相手に伝わっているか」を丁寧に確かめながら一步一步前に進む子どもを育てていきたい。そう思った時に、今クラスの中に多様な子どもがいるということは、とても大事なことなのではないだろうか。もしクラスに均質な皆同じような子どもばかりだったらどうだろうか？多様な子どもたちがいる中で幼児期を過ごしてきたということが、20年後の子どもたちの力に絶対につながると確信している。



背伸びをして身を乗り出してお皿
を渡すクッキー屋さん(3歳児)

参加者より『科学する心が育まれるために、どんな援助や環境が大切か？』

- ・ 子どもたちが何を楽しんでいるのか、何に興味をもっているのかを見取り、それを満たせるような言葉掛けや環境設定が大切である。
- ・ 子どもたちがじっくりと試したり、考えたりできる環境づくり、教師間の連携が大切であること、そのことが「科学する心」育てていくのだと学んだ。
- ・ 教師がまず面白がること、不思議を楽しむこと、そんな大人の姿を見て、「科学する心」が幼児に育まれるのだと思った。
- ・ 援助や環境で最も大切なのは『自由』だと思った。幼児が自由に発想し、自由に物・人・事に関わることを許してもらえる環境が大切であり、それを受け止め、褒めてもらえる環境が大切である。
- ・ 成功か失敗かではない、「どうなるのか?」「次はどうしたいのか」を子どもと一緒に考え試すことが大切だと思った。
- ・ 自分で選び試し考えることができる環境。実際に体験して、感じて、分かることが大切である。

参加者の『感想』

- ・ 子どもたち一人一人が皆夢中になって遊び、やりたいことを見付け、やりたいことに向かって試したり考えたり…それを実現している環境が、先生方の見守りや声掛けがとてもステキでうらやましく思った。私自身もワクワクし、遊びたくなることばかりだった。
- ・ 子どもが面白いと感じることを深めていくことが学びの始まりなのだと感じた。また、子どもの発言、アイデアを聞き逃さずに取り入れていくことの重要性を感じた。子どもの発言、行動を見て、子どもは保育者の鏡なのだろうと強く感じた。
- ・ 先生たちが答えを言わず、子どもが自分で考えられるように援助しているのが凄いと思った。そして、いろいろな遊びがあり、子どもたちが飽きることなく遊びにずっと夢中で展開していく姿を見て驚いた。改めて子どもたちの意思や考えを大切にしたいと思った。
- ・ 遊びの継続や、どこまでなら安全か危険かを、子ども自身で考えられるようになるための援助等、もう何年も課題だと感じていることへのヒントをもらうことができた。
- ・ 自然林で「こんなものを作りたい」と思った時に、子どもと一緒に調べて、実現できるよう皆で工夫し、探究し、成し遂げていく力が先生方にあるので、子どもたちもその中でびのびと遊んでいるのがよくわかった。
- ・ 冬の外遊びは行きたがらない子がいると思ったが、皆遊び込んでいて、子どもが主体で発展しているからだと感じた。
- ・ 今自分のクラスに特別な教育的支援の必要なお子さんがいて悩むことも多かったが、その子の得意なことや好きなことをたくさん認め、心を改めて保育していきたいと思った。